

Title	「野生生物と社会」の変動期における知識創造の可能性 : オープンデータの生産や共有を通じて
Author(s)	富田, 涼都; 江成, 広斗; 敷田, 麻実
Citation	第25回「野生生物と社会」学会大会プログラム・講演要旨集: 24-24
Issue Date	2019-11
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16905
Rights	Copyright (C) 2019 「野生生物と社会」学会. 富田涼都, 江成広斗, 敷田麻実, 第25回「野生生物と社会」学会大会プログラム・講演要旨集, 2019, p.24.
Description	

「野生生物と社会」の変動期における知識創造の可能性 —オープンデータの生産や共有を通じて—

The Potential of Knowledge Creation in the Period of Instability for Wildlife and Human Society: From Open Data Production and Sharing

富田 涼都・江成広斗・敷田麻実

Ryoto TOMITA, Hiroto ENARI, Asami SHIKIDA

1. テーマセッション趣旨

「野生生物と社会」の関係性は、自然環境及び社会環境の相互的な変化によって今後大きく変わることが予想される。もちろん、これまでも自然と社会の相互変化があり、鳥獣害などの軋轢も発生してきた。しかし、今後予想されるのは、自然環境では人類による地球規模の気候変動などを背景に「人新世 (Anthropocene)」という新しい地質年代が提唱され、社会では「人口減少社会」が指摘されるような、自然と人間のシステムの前提条件や構造自体の変化を含む、より根本的な変動期の到来である。これに対して専門家を中心とする従来知識生産や、限られた読者を想定した「学術誌」などの共有体制では、「野生生物と社会」の変動に対応することが難しくなるかもしれない。そのなかであるべき知識創造の姿はまだ手探りが続いている。

一方で、共有すべき「野生生物と社会」の知識自体が存在しないわけではない。現場においては専門家に限らずとも行政や民間セクター、住民などの間で、これまで「知識」としてカタチにならなかったものを含めて、リアルタイムな知的な蓄積自体は存在している。しかし、これらは埋没しやすく、その知的な蓄積を共有するための方法論も確立できていない。

本テーマセッションでは、こうした問題を解決するために、「オープンデータ」が果たしうる役割や潜在的な可能性に着目したい。「野生生物と社会」学会においても、学術誌上において「データペーパー」が設定されているが、これをどう「使える」ものにすべきなのか。どんなデータが潜在的に存在し、どういう形式で共有するのがよいのか。その試みは始まったばかりである。試行錯誤について参考事例などを紹介しながら、オープンデータの生産や共有を通じた、「野生生物と社会」の変動期における知識創造の姿について、フロアとの意見交換を通じて構想を得ていきたい。

2. 講演者と講演タイトル

- ・富田 涼都 (静岡大学農学部)

「人新世」の「人口減少社会」における在来知の掘り起こしと共有の可能性と課題

- ・江成 広斗 (山形大学農学部)

データペーパーのトレンドと展望

- ・呉星辰 (北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科)・敷田麻実 (北陸先端科学技術大学院大学知識マネジメント領域)

データから知識へ：シビックテックのオープンデータ活用から学ぶ

- ・フロアを交えた総合討論